

少年時代を想う

——少年時代の遊びは心を豊かにする——

公益財団法人育てる会 会長 青木孝安

私の子供時代（昭和10年代）、子供の仕事は「遊ぶことだ」と言われたものだ。戦争の足音が聞こえて来て来てはいたが、まだ、子供たちの環境は、のどかで、ゆとりがあったように思う。こんな中で、私は、思いつきり、多彩で豊かな遊びをして過ごしたように思う。思い出すままに書こう。

下校途中に泳いだこと

夏は、近くの川の淀みで泳ぐことに夢中になった。下校の途中でも、川の土手にランドセルを放り出し、パンツひとつになって泳いだものだ。帰りには、木の小枝を十字に結び、それに濡れたパンツをかけて、振り回しながら帰ったものだ。家に着くころには、ほぼ乾いていた。

カジカ捕りのこと

銚しやうがを使ってカジカを獲り、くし刺しにして乾燥し、甘辛く煮てもらって弁当のおかずにした。

石の標本作りのこと

素足で河原の石ころの上を歩くことにより、石ころの違いに興味を持ち、違う種類の石ころを集め、金づちで割ったりして、小さな石の標本を作って楽しんだ。

凧たこあげのこと

冬は凧作りと凧あげに夢中になった。いろいろな形の凧を作り、糸の張り方、細長い紙のシッポの付け方で、あがり方を調べた。凧あげで、日本には、冬の季節風が吹くことを知った。

どんど焼きのこと

小正月こしょうがつには、子供たちだけで松を集めて、どんど焼きを行った。

私は小学校高学年であったので、低学年の子供の面等を見るのに苦労した。

書初めの紙が、燃えながら舞い上がるのを覚えている。残り火で餅を焼いて食べたが、炭火臭くてあまり美味しくなかったことを覚えている。

「矢じり」集めに夢中になったこと

私は、縄文土器集めに夢中になった。特に、「矢じり」（石鏃）集めである。遺跡があるらしいと言われるところは、ところかまわず畑に入り、探しまくったものだ。友人と数を競い、数十個集めた。今はそれらを何処へやったか記憶にない。ただ、細長い三角

形をしていたことだけは覚えている。微妙に光る三角形の石を見つめて、昔の人のことを思ったものだ。そんな遊びから、当時、私は考古学者になろうかと思った。

北斗七星のこと

夏の空の頭上に、北斗七星が、はっきり見えるのに感動した。それが、冬になると、北の空に横たわっているのには驚いた。晴れた日の冬の夜空を眺めると、星屑が頭上に覆いかぶさるように思えて、恐ろしささえ感じた。星空を眺めていると、時々、流れ星が、糸を引くような光の線を残して消え去るのを見た。流れ星が消え去った瞬間、私は得も言われぬ寂しさがこみあげてきたのを覚えている。何故か分からなかったが。

私は、天文学者になるのもいいな、と思った。

これは余談であるが、戦争が激しくなるにつれ、夜空の星がますます鮮明に見えるようになった。晴れた冬の夜など、空を見つめると、全身が星屑の中に吸い込まれるかのように感じ、恐ろしささえ感じたものだ。

その理由は、当時、B 29の爆撃に備えて、厳しい灯火管制が敷かれていたので、地上は全くの闇で、星の輝きを遮るものは全くなかった。(灯火管制とは、爆撃機に見えなないようにするため、人家の電灯の灯かりを外に漏らしてはいけない、という規則である。電灯の笠を黒い布で覆い、灯りを机上のみに照らして勉強したものだ。時々、監視員が巡回して来て、灯りが少しでも外に漏れていると厳しく注意された。)

日に日に敗戦色が濃くなり、希望が失われていった当時、唯一の良かったことは、この、夜空の星が美しく見えたことであつたと言つても決して過言ではないであろう。

いろいろな遊びのこと

私の子供時代は、川と共にあつた。特に、魚捕り、魚釣りなどは、四季を通じての遊びであつた。

手製の釣り竿での釣りは、小学生の私には、せいぜい小さなハヤが釣れるのがいいところであつた。私は大人たちが釣っている、大きなウグイを釣りたいと思ひ、挑戦を繰り返したが、遂に出来なかつた。私は、水産大学へ行き、魚のことを勉強し、漁船に乗り、魚をたくさん獲りたいと思つた。

その他、忘れられない遊びとしては、野鳥のミソサザイを追いかけたことだ。冬になると、ミソサザイがあちこちの木々の間を飛び回っていた。私は、あの愛くるしい姿と、息の長い鳴き声、そして、地上すれすれの木々の間を飛び回る姿を見て、どうしても捕まえないと思ひ、捕虫アミをもって追いかけてまわしたが、ついについに捕まえることができなかった。今でも、あの、愛らしい姿が忘れられない。

子供時代に遊びや自然体験をしなくても子供は育つと思ふ。でも、子供時代、豊かな遊びをして育つた人の、心の奥には、幸せの灯が灯つていると思ふ。